

氏名	中川 三千代
学位の種類	博士（芸術学）
学位記番号	博甲第 8233 号
学位授与年月	平成 29年 3月 24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	デルスニスと日仏芸術社—展覧会活動を中心に—

主査	筑波大学教授	博士（芸術学）	直江 俊雄
副査	筑波大学教授	博士（芸術学）	石崎 和宏
副査	筑波大学教授	博士（芸術学）	齊藤 泰嘉
副査	東京ステーションギャラリー館長		富田 章

## 論文の内容の要旨

中川三千代氏の博士学位論文は、フランス人美術商エルマン・デルスニス（Herman d'Oelsnitz, 1882－1941）が1920年代日仏美術交流において果たした役割について検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

本論文は全8章から成る。序章で著者は、研究の背景、目的、先行研究、研究の課題、本論の構成について述べている。著者は、デルスニスが10年に及ぶ仏蘭西現代美術展（仏展）等の展覧会活動により日本に将来したフランス美術作品が数千点に及びながら記録資料が乏しく、その業績に対する客観的評価が十分になされていない点を研究の背景として指摘した上で、デルスニスが黒田鵬心（本名黒田朋信、1885－1967）とともに設立した日仏芸術社の展覧会活動等について新資料を交え包括的に解明し、評価することを研究目的とするとしている。

第1章で著者は、デルスニスが第1回仏展を開催するまでの経緯に関し、主に外務省資料に基づいて日本政府とデルスニスとの関係を整理している。1921年に石井菊次郎駐仏大使がデルスニスの展覧会開催計画を本国に打電し、デルスニスが提出した仏展計画の「覚書」を郵送したことが仏展の始まりである。著者は仏展の運営について第1回仏展で政府機関との協力体制が生まれ、関税等の問題もほぼデルスニスの意向通りに運用されていったこと、また、民間レベルにおいても、当時三越に勤務し国民美術協会理事であった黒田鵬心を中心に会場設営と売約事務が行われ、第1回仏展から日本との協力体制が整っていたことを指摘している。

第2章で著者は、仏展全期間の区分と実施体制について述べ、三越、大阪朝日新聞社等が仏展に関わった経緯や果たした役割などを考察し、各回の特徴を述べている。第1回仏展から第3回仏展までを初期、日仏芸術社設立時期の第4回仏展から第7回仏展までを中期、巴里日本美術展覧会、第8回仏展、十週年記念フランス美術展覧会までを後期として論じている。著者は彫刻の数が次第に減少するものの、大型彫刻を積極的に将来するようになったこと、絵画の点数が増加の一步をたどり、工芸品については装飾的なものから実用品までその数は毎回数百点となったこと、作品の価格設定は幅広い価格帯であっ

たことなどを指摘している。教育機関からは日本の美術家や学生がフランス美術界の多くの運動を日本に居ながら勉強することが出来ると評価を受けたとしている。

第3章で著者は、日仏芸術社設立の経緯を述べている。さらに展覧会活動、画廊活動、出版活動の3つに区分して日仏芸術社の活動内容を述べている。合計23回に及ぶ地方都市への展覧会が活況を呈したことを述べ、こうした活動がより多くの人にフランス美術鑑賞の機会を提供し、また収集の機会も与えたと指摘している。日仏芸術社の出版活動は、月刊誌『日仏芸術』の発行、展覧会図録、絵葉書、画集など多彩であり、展覧会と出版が複合している点に日仏芸術社の特色があることを明らかにしている。

第4章で著者は、第7回仏展全体の開催経緯や、会場となった東京府美術館の絵画陳列室などの構造を詳述し、3つの展覧会が同時開催された状況を解明している。第7回仏展は仏蘭西装飾美術家協会展覧会と通常の仏展、並びに国立リュクサンブール美術館からの貸出展示が加わった3部構成であり、デルスニスのインタビュー記事や外務省資料をもとに、デルスニスと日仏芸術社にとって、この展覧会が重要な位置を占めていると指摘している。仏蘭西装飾美術家協会展覧会の展示構成の分析を通じ、デルスニスがフランスでの食堂、寝室、書斎といった生活空間そのものを再現しようとしていたことを明確にしている。

第5章で著者は、第7回仏展の3部構成のうちの1つである国立リュクサンブール美術館収蔵品の貸出展示について検証し、その特徴、開催経緯、展示状況などを解明している。展示作品の特定は、図録、目録、雑誌記事などの資料と、オルセー美術館の作品データベースを利用して行い、その結果貸出作品23点すべてについて、作家名、作品名、来歴、現在の所蔵先などを明らかにしている。

第6章で著者は、巴里日本美術展、第8回仏展、十周年記念フランス美術展覧会の3回のそれぞれ特異な展覧会について述べている。デルスニスは1928年の第7回仏展を境に来日しなくなり、また、1932年の日仏芸術社閉鎖により日本・フランス双方の活動拠点も失うが、正木直彦らが在パリのデルスニスへ拠金を実行したこと、さらに1934年から1936年の3年間にデルスニスがフランスにおいて作品を選択した展覧会が日本で開催されたことを明らかにし、パリに暮らすデルスニスが晩年まで日本へのフランス美術紹介に尽くしていたと指摘している。

結章で著者は、論文全体を通じてデルスニスの活動を包括的に明らかにし、特に第4章、第5章において展覧会活動に対する彼の理念が活動全体にどう影響し、どう実現したかを論じたとしている。デルスニスの活動に関する評価については、日本人協力者たちと緊密に連携した芸術支援（鑑賞支援、流通支援）と国際貢献（政府機関と民間組織双方にまたがる連携による1920年代日仏美術交流）がその業績として高く評価できるとしている。

## 審査の結果の要旨

### （批評）

エルマン・デルスニスは1920年代日仏美術交流に重要な役割を果たした人物ではあるものの、彼が扱った作品の散逸や記録資料の少なさにより、日本においてもフランスにおいても十分な研究がなされているとは言い難い。そうした状況において、著者は外務省資料やデルスニスの仏文インタビュー記事などの新資料を発掘し、これまで不明な部分があった仏展の開催経緯や地方への展開について詳細に論述している。また、東京府美術館の建築図面と仏展展示記録写真を照合し、さらにオルセー美術館の所蔵作品データベースも活用し、これまで不明であった展示作品の特定をなし得た点、さらにデルスニス晩年の活動について解明した点など、デルスニス研究に大いなる進展をもたらしたことは評価に値する。また、同時代の大原コレクションや松方コレクションと違い、デルスニスの将来作品は、少数の作品を除いて、美術館での収集保存とはならなかったが、多大な数の日本人が個人でフランス美術品を持つことができた。こうした日本各地へのフランス美術の普及流通を芸術支援の観点から意義付けた点も本論文の功績である。仏展日本残留作品の詳細な調査やフランス側資料の更なる渉猟などが今後の研究課題として残されているが、エルマン・デルスニスの展覧会活動を包括的に解明し、1920年代日仏美術交流研究に新知見をもたらした点は高く評価されるべきものである。

平成29年1月12日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。